

中国の詩人とトポフィリア — 陪都の文学

中 尾 健 一 郎

一 トポフィリア

人間を形作るのは環境であるという。しかしその環境は必ずしも一定不変のものではなく、ある時は自らの力によって、またある時は抗いようのない大きな運命の力によって変えられてゆくものである。ところで、中国の詩人たちは、往々にして自らの抱負や感慨を述べるばかりでなく、当時の時代状況、そして政治や社会風潮を詩に詠みこむ。これらの詩歌では、詩人によって見聞され、感じられたことが詩歌となって伝えられている。

しかし、逆の視点から見れば、必ずしも詩人の個性のみが詩歌の内容を決定するというわけではなからう。つまり各時代における文化や環境、及び歴史的な事件が詩人を育み、詩を生み出すとも言える。ここで、詩人と都市との関わりについて考える場合、

「トポフィリア」(Topophilia) という概念が詩人たちの活動に深く関わるように思われる。トポフィリアとは、アメリカの地理

学者イー・フー・トゥアン氏の著書名であると同時に彼が提唱した概念であり、「人々と、場所あるいは環境との間の、情緒的な結びつき」のことである。簡単に言えばその土地への愛着、つまり「場所愛」である。トゥアン氏は次のように述べる。

「トポフィリア」という言葉は新造語であり、物質的環境と人間との情緒的なつながりをすべて含むように広く定義できるといふ点で、便利な言葉である。環境とのこうした情緒的なつながりは、その強さも微妙さも表現様式も、きわめてさまざまである。環境への反応は、まず第一に審美的なものかもしれない。そしてそれはまた、人が眺望から手に入れるはかない喜びから、同じようにはかないが、しかしはるかに熱烈な、突然啓示的に現れる美的感覚まで、さまざまにわたるのだ。その反応は、空気や水や土の感触からもたらされる喜びのように、触覚的なものかもしれない。もっと永続的

で、しかし表現するのはもっと容易でないものは、それが故郷であったり、思い出の場所だったり、生計を立てる手段であるという理由から、人が場所に対してもつ感覚である。^②

トポフィリアが生まれる環境の例として挙げられているのは、故郷や思い出の場所、生計を立てる場所である。近年、この概念は中国学の分野でも応用されており、詩人の創作の場に対する感情を読み解く一つの關鍵語となっている。^③例えば、陶淵明や白居易の詩文には、それぞれが晩年を過ごした都市に対する愛着が見受けられるが、これらもトポフィリアと称してよからう。詩人たちがトポフィリアを抱いた場所を挙げれば、都市の数だけそれが存在するであろうし、中国には古来多くの詩人が存在するため、小論においては「陪都」において活動した詩人、就中、会稽で創作活動を行った王羲之と謝靈運について論じよう。

二 陪都について

「陪都」という言葉自体は日本語の辞書には見えないが、「副首都」のことである。^④「陪都」という言葉が何時頃から使われているかは不明であるが、概念としては紀元前十二世紀の西周より存在する。西周の洛邑（洛陽）以外の例としては、前漢の洛陽、後漢の南都である南陽（光武帝の出身地）、隋唐及び北宋の洛陽、明の南京などがあり、もっとも顕著な例としては、唐代に西都長

安に対し、東都洛陽が置かれていることが挙げられる。しかし、陪都として挙げられる都市は、各王朝において一つと限定されていたわけではない。例えば、北宋では西京河南府（洛陽）のほか、南京応天府（現在の河南省商丘市）、北京大名府（現在の河北省大名県）の三都が置かれていた。その中で南京応天府は明の南京と同様に宋朝の発祥の地であり、北京大名府は国境守備の要衝であった。軍事的要衝と言えば、南朝においては荊州江陵（現在の湖北省江陵县）、南徐州京口（現在の江蘇省鎮江市）が想起される。江陵と京口は南朝における国土防衛の拠点であって、それぞれに西府軍と北府軍が置かれており、これが国軍の中核であった。これらの都市は人口も多く、京口の人口は首都建康（南京）に次ぎ、江陵の属する荊州の人口は京口に次ぐ。つまりこれらの都市は防衛上の拠点としての機能や都市の規模から見れば、陪都と見なすことが出来る。南朝においては建康の首都としての位置が盤石ではなかったため、東晋が桓玄に篡奪された時には江陵が新都に定められ、また他の地方都市に遷都の議論が提起されたこともある。

このように遷都の議論が起こり、あるいは実際に新都が置かれ、かつ相当の規模を備える諸都市も陪都と見なして良いかと考える。具体的に言えば、南朝の江州尋陽（現在の江西省九江市）と東揚州会稽（現在の浙江省紹興市）がそれである。前者は江陵と健康を結ぶ軍事・交通の要衝であり、荊州には及ばないものの

それに近い人口を具えており、東晋の安帝が元興二年（四〇三）十二月に一時的にはあるが幽閉されている。また会稽も人口の規模は江州とほぼ同じであり、こちらも遷都の候補地に挙げられたことがある。近代の例であるが、『漢語大詞典』（上海辞書出版社、一九八六年。第十一冊、一〇五三頁）の「陪都」の項に記述されているように、抗日戦争時期の重慶が、北京から遠く離れた四川の地にありながら陪都とされたのも、首都からの距離や都市の規模はともかくとして、その都市に国家の政府が置かれるという行政上の必要性に駆られたからであった。そうしたことから、尋陽と会稽を陪都に数えることに關しては、あるいは異議もあるかと思うが、これらの都市が南朝において主要な都市の一つであったことは間違いないことであるし、特に尋陽は長江の中流域に位置する軍事上の拠点であるため、やはり陪都に挙げられるのである。

以上のことを踏まえて定義すると、陪都とは首都に準じる副首都という意となる。そしてその概念を定義すると、次の四点のいずれかの条件を満たすものとなるであろう。

- 一、皇室に縁りを持つ都市。
- 二、首都に並ぶか、これに準じる規模及び経済力を有する。
- 三、首都に従属し、軍事上の要衝として首都の機能を支える。
- 四、都市として遷都の候補地となるだけの規模を有する。

三 東晋から劉宋の詩人における陪都

——王羲之・謝靈運を中心に

前節においては、南朝の陪都として京口や江陵のほかに、会稽と尋陽を数えることを提言した。一見するとこの兩地は、単なる田舎の地方都市のようであるが、これ以後述べるように実際にはそうではない。特に会稽と言え、王羲之（三〇七～三六五）や謝安（三二〇～三八五）の故地であり、王羲之の「蘭亭の宴」、謝安の「東山の遊び」、そして謝靈運（三八五～四三三）の山水詩の舞台でもある。彼らの作品を読めば、美しい会稽の自然が目に浮かぶようであるが、これが会稽という都市の存在を受けたものであるという視点がこれまでに欠けていたのではないかと思われる。そこで本節では、陪都における詩人の創作活動の一つのモデルとして王羲之及び謝靈運の会稽との関わりについて考察し、かつ王羲之と謝靈運における会稽に着目し、彼らにおける首都と会稽の位置について述べよう。何故ならこの二人が官職を完全に放棄した隠者としてではなく、官僚の身分に在りながら隠逸的な楽しみを述べた作品を残しているからであり、また、隠逸的な生活を送った後代の知識人の先駆けとなる存在だからである。

（一）王羲之

王羲之は、六朝貴族を代表する名門琅琊の王氏の出身であり、

書道家としても有名である。そして彼の名を高からしめているのが「蘭亭の宴」である。「蘭亭の宴」とは、周知のように王羲之を始めとする会稽の名士が集った、流觴曲水の風雅な宴である。

永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事を脩むるなり。群賢、畢く至り、少長、咸な集まる。此の地に崇山峻嶺、茂林脩竹有り。又た清流激湍有りて、左右に映帶す。引きて以て流觴の曲水と為し、其の次に列坐す。糸竹管絃の盛んなる無しと雖も、一觴一詠すれば、亦た以て幽情を暢叙するに足る。是の日や、天朗かにして気清み、恵風和暢す。仰ぎては宇宙の大なるを觀て、俯しては品類の盛んなるを察す。目を遊ばしめて懐ひを騁する所に、以て視聽の娛しみを極むるに足る。信に楽しむべきなり。

(王羲之「蘭亭序」)

会稽の豊かな自然の中で行われた「蘭亭の宴」は、共に詩を作るといふ点では、西晋の石崇(二四九〜三〇〇)が洛陽で開いた「金谷の宴」と同じであるが、「糸竹管絃の盛んなる無し」と述べられることから、遊宴に付きものの音楽はささやかなものであったことが分かる。つまり、贅沢を排除した宴が催されたものと言えよう。『世説新語』企羨篇より、王羲之は「蘭亭の宴」を開くにあたり、「金谷の宴」を意識していたことが察せられるが、そうであれば、王羲之は贅を尽くした石崇に対して、より自然の中に没入し、奢侈を排する方向で宴を催したと言えるだろう。それ

では、この宴の主催者である王羲之が日頃このような優雅な宴を楽しんでいたのかと言えは必ずしもそうではない。晋王朝が江南の地に再興されてから、会稽は江南の中心地の一つとして脚光を浴びており、また会稽内史として会稽の行政を一手に掌握する王羲之は多忙であった。つまり「蘭亭序」に見える優雅な集会は、王羲之が多忙な政務の合間を縫って催したものである。しかも刺史が多忙なのであれば、そうした土地は閑散とした僻地であるはずがない。そのことは、会稽が遷都の候補地となったことからも窺い知ることができる。

東晋時代には、幾度か遷都の問題が生じたが、最初の遷都の建議は、成帝の咸和二年(三二九)から咸和四年(三三一)に起きた「蘇峻の乱」の時、首都建康が戦火に見舞われた際に起きた。まず温嶠が豫章(現在の江西省南昌市)に遷都することを提起し、続いて提起されたのが会稽である。結局、宰相王導の仲裁により、遷都の件は沙汰止みとなったが、この一事をとって見ると、会稽は遷都が建議されるだけの規模を具えた都市であったと言える。また東晋の簡文帝司馬昱は帝位に就く以前は会稽王であり、また東晋末期に朝政を壟断した王族司馬道子は、若くして会稽五万九千一四〇戸の食邑を与えられている。彼らを与えられた封土は、後の彼の官歴を見れば、有力な王族に与えられるに相応しい所領であったと言える。また周知のように会稽は、王羲之ばかりでなく謝安や謝靈運の莊園のあった地域である。此処に多く

の貴族が集って宴を催すことが出来たのは、郊外に豊かな自然があったこともさることながら、会稽には貴族の集居を許すだけの都市機能が具わっていたからである。

江南には、尋陽、会稽、江陵、広陵（現在の江蘇省揚州市）、京口、武昌（現在の湖北省武漢市）、豫章、さらに襄陽（現在の湖北省襄陽市）、益州（現在の四川省成都市）、広州（現在の広東省広州市）等の諸都市が繁栄していたが、その中でも尋陽と江陵は、それぞれ長江の上流と中流に位置し、政治的・地理的に首都建康に次ぐ重要な都市であった。試みに、『宋書』地理志より戸数五万以上の州の人口と首都建康（南京）からの距離（水路による）を近い順に挙げると、次のようになる（○を冠したのが州、括弧内は州都の現在名である）。

都市名	戸数	人口	南京からの距離
○揚州(南京)	一四万三二九六戸	一四五万五六八五人	○里
○南徐州(鎮江)	七万二四七三戸	四二万〇六四〇人	二四〇里
○東揚州(紹興)	五万二二二八戸	三四万八〇一四人	一三五五里
○江州(九江)	五万二〇三三戸	三七万七一四七人	一四〇〇里
○荊州(江陵)	六万五六〇四戸	(記載なし)	三三八〇里
○益州(奉節)	五万三二四二戸	二四万八二九三人	九九七〇里

単純に戸数と人口の多寡が都市の規模を表すものでは必ずしもないだろうが、建康に近接する南徐州はともかく、水路でおよそ六〇〇キロメートル離れた東揚州（会稽）や江州（尋陽）が、建康周辺の諸都市に及ばずとも遠くない戸数をもっていることは注すべきであろう。王羲之や謝靈運が別荘を構えた会稽、陶淵明が田園生活を営んだ尋陽は、江南屈指の規模を持つ州の中であり、その住まいの所在は決して辺鄙な片田舎ではなかったのである。

ところで、王羲之の会稽赴任の背景には、当時、西府江陵を根拠地とする桓温と、会稽王司馬昱（後の簡文帝）及び北府京口を根拠地とする殷浩の二大勢力の抗争があったと考えられており、王羲之が「蘭亭の宴」を開いた永和九年（三五三）は、殷浩が北伐を行っている年であった。会稽王を中心とする建康の貴族達が北伐の挙に出ている時に、王羲之等は江陵の桓温一党と建康の司馬昱・殷浩との対立から一步離れて第三極を構成していた。しかもその極とは、自然の優美さを活動の背景に伴うものであり、王羲之等は会稽を根拠地として、自らの風雅な集會を喧伝したと言えるだろう。だが忘れてはならないのは、前述のように優美な自然を具えてはいるが、行政単位としての会稽は大郡なのである。そして王羲之はこの大郡に抛りつつ、首都建康に対して、自身を含む貴族の活動を「蘭亭序」によってアピールしたのである。

(二) 謝靈運

王羲之没後、この会稽を舞台に華麗な山水詩を多く詠じたのが、劉宋の謝靈運である。周知のように謝靈運は、「山居賦」(『藝文類聚』卷六十四、居処部四・齋所引)を始め、会稽における生活を多くの詩賦に詠んでいる。まず彼自身が会稽について述べた文を次に挙げよう。

会境(会稽) 既に山水豊かにして、是を以て江左の嘉遯、並に多く之れに居る。但だ季世には栄を慕ひ、幽棲する者寡し。或ひは復た才は時の求むるところと為るも、志に従ふを獲ず。王弘之の若きに至りては、衣を払ひて耕に帰し、歴を踰ゆること三紀。孔淳之は窮岫に隱約し、始めより今に迄る。(謝靈運「与廬陵王書」、「謝康樂集」卷一)

これは、隱棲初期の劉宋の景平元年(四二三)に、王族劉義真に宛てた書簡の抜粋である。謝靈運はこの書簡において、豊かな自然に恵まれた会稽にて、自身は王弘之や孔淳之のような隠士と共に交流していることを述べているが、ここで、謝靈運は何故に会稽に隱棲したのか、ということについてふれよう。謝靈運の隱棲の志は、彼が永初三年(四二三)に永嘉太守に赴任する途上、故郷である会稽郡始寧に立ち寄った時に生じたと考えられる。

束髮懷耿介 束髮 耿介を懷き

逐物遂推遷 物を逐ひて遂に推遷す

違志似如昨 志に違へるは昨の似如く

二紀及茲年

緇磷謝清曠

疲爾暫貞堅

拙疾相倚薄

還得靜者使

剖竹守滄海

枉帆過舊山

山行窮登頓

水涉盡洄沿

巖峭嶺稠疊

洲繁渚連縣

白雲抱幽石

綠篠媚清漣

葺宇臨迴江

築觀基曾巖

揮手告鄉曲

三載期歸旋

且爲樹粉檣

無令孤願言

二紀 茲の年に及べり

緇磷 清曠を謝り

疲爾 貞堅に暫づ

拙疾 相ひ倚りて薄り

還た靜者の便を得たり

竹を剖きて滄海を守り

帆を枉げて旧山を過ぎる

山行して 登頓を窮め

水を涉りて洄沿を尽くす

巖峭 嶺は稠疊たり

洲繁 渚は連綿たり

白雲 幽石を抱き

綠篠 清漣に媚ぶ

宇を葺きて 迴りし江に臨み

観を築きて 曾なりし巖に基づく

手を揮ひて 郷曲に告ぐ

三載 歸旋を期さんと

且く爲に粉と檣(棺材)を樹えよ

願言に孤かしむること無かれ

(謝靈運「過始寧墅」詩、『文選』卷二十一)

謝靈運の故郷である始寧が会稽郡に属することは偶然であろうが、何故彼がこの時になって隱棲の志を抱いたかを考えると、次

の三点が鍵となると思われる。それは故郷、それからこれに対する「トポフィリア」の発生、及び政治的な挫折である。

まず故郷という点についてであるが、東晋において北方出身の貴族達が南方に土着することになった時に、南方を故郷として意識するようになったのは、新しい居住地に自らの墓を設けたことよってであったとされている。祖父謝玄の原籍は河南の陳郡陽夏（現在の河南省太康県）である。『宋書』卷六十七、「謝靈運伝」に「靈運の父祖、並に始寧県に葬らる。並びに故宅及び墅有り。遂に籍を会稽に移し、別業を修営し、山に傍ひ、江を帯び、幽居の美を尽くす」と記されているように、祖父と父が会稽の地に葬られているのであるから、謝靈運にとって会稽は故郷として認識されていたことになる。父祖が葬られた地であるということは、謝靈運にとって生まれた土地であるという以上の愛着を会稽に抱かせたことであろう。次にトポフィリアについてである。会稽は謝靈運にとって故郷であり、トポフィリアを生むにふさわしい。それだけでなく、人間の場所に対する反応の第一義的なものが審美的なものであるならば、彼が会稽の山水に対して抱いた自然愛好の姿勢は、まさしくトポフィリアに因るものであると言える。

最後に政治的な挫折である。前述のように謝靈運は永初三年（四二二）に太守として永嘉（現在の浙江省温州市）に赴任したが、これは謝靈運自身にとっては左遷であった。劉宋の建国以

前、高祖劉裕のライバルであった劉毅に仕えた事により、謝靈運の政治的立場は元々不安定であったが、後に庶人に落とされた劉義真を担ぎ上げようとしたことが更に立場を悪くし、執政徐羨之の策謀によって永嘉に出されたのである。建康に居住していた謝靈運が、永嘉へ赴く途中に立ち寄った会稽で、この地を隠棲の地とすることを決心したのは、謝靈運が彼の地を来訪者の目で見、その自然の美しさを再発見したからであると考えられる。我々は一カ所に定住していると、自らが住む土地が持つ特色に注意を向けなくなることが多々ある。しかし、外の世界からの来訪者は、地元の住民が無意識の底に沈めてしまった同地の特色に、新しい見方を与えてくれるのである。謝靈運が少年時代ではなく、左遷によって首都建康の生活を放棄せざるを得なくなった立場で見た会稽の自然は、来訪者の立場から見、より美しく見えただけである。

これとはいささか事情が異なるかもしれないが、謝靈運の隠棲を見たとき、筆者はある人物を想起する。それは十八世紀のフランスの人、ジャン・フランソワ・ミレーである。よく知られているように、彼はバルビゾン派に属する画家である。バルビゾンとは、パリのリヨン郊外にある農村であり、テオドール・ルソーやカミーユ・コロを始めたとする画家たちが、自然の風景の美しさに魅了され、彼の地の風景や農民たちの生活を描いたとされるものである。バルビゾン派の画家たちがバルビゾンに移住すること

になった個別のいきさつについては未詳であるが、ミレーの移住については、その動機がパリで流行し始めたコレラの感染を避けることのほかに、彼が首都での生活に倦み疲れたためであったとされている^⑤。もともとグレヴィユというイギリス海峡に臨む寒村の生まれであったミレーは、絵画の師匠に見いだされてパリに出てきたが、糊口をしのぐために喧噪の中で人物画を描き続ける生活に疲弊し、バルビゾンに移住した。そして本来的に得意とした風景画を描くことで、ミレーは画家としての充実した生活を営むことが出来たという。生まれた時代も環境も全く違うためミレーの創作活動は直接の比較の対象とはならないが、首都建康から追放され、挫折感を抱いた謝霊運が、会稽の地の山水の美しさによつて、隠棲の志を抱き、後には彼の地を舞台とした山水詩を生み出したことを想像させる一助となるだろう。

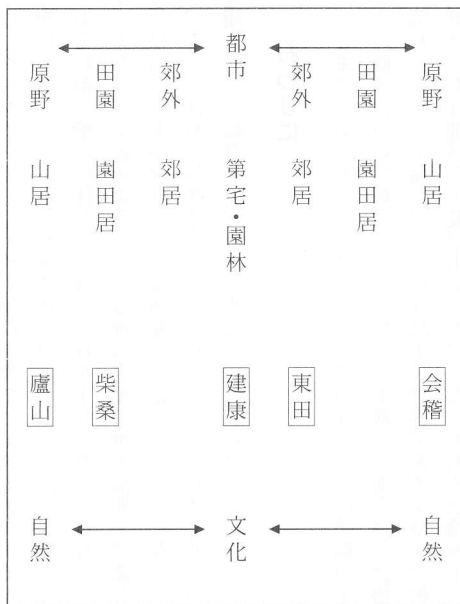
ここまで述べた三点が、謝霊運が会稽に隠棲することを決心したきっかけである。ただ、隠棲と言っても、謝霊運が会稽に居住したのは前後二回の計六年である。会稽という地を愛好しながらも、謝霊運の実際の隠棲期間は四十九年の生涯の八分の一に過ぎないのである。そしてその生活が完全に隠遁を志向したものであったかと言えば、必ずしもそうでないことは彼の官歴が具体的に証明している。しかも前に見た劉義真宛ての書簡が書かれたのと同時期に作られたとされる「山居賦」は、謝霊運の別荘を写実的に描いた作品であるが、その創作の動機は、自己の持つ荘園の

見事さを首都建康の人々に誇示することであったと考えられている^⑦。謝霊運が会稽に止まりながらも首都に向けて自らの生活の状況を発信していたことは、『宋書』に「隱士王弘之、孔淳之等と縦放して娛しみを為し、終焉の志有り。一詩有りて都邑に至る毎に、貴賤、競ひて写さざる莫く、宿昔の間、土庶に皆な遍く、遠近、欽慕し、名は京師を動かす」と記されていることから看取される^⑧。会稽という場所は、既に謝安や謝玄の別荘があったことで知られていたが、その優美な自然環境は、前に見たように建康周辺における貴族の風雅な生活ぶりも、建康の住人の耳目を集めるものであったのである。その先例は、王羲之の「蘭亭の宴」に見た通りであるが、王羲之や謝霊運は何故に会稽をこのような情報発信の場としたのであろうか。

当時、江南の文化世界にあって廬山と会稽は山水の美の魅力で人々を惹きつける名所として有名であり、またその自然環境の豊かさによって、都市の人々の羨望の場所であった。

そうすると王羲之や謝霊運等が都市人の注目する地に住み、彼の地で詩会を開き、詩文を綴ったのであれば、畢竟それは首都建康の人々の関心を引いたに違いないはずである。ただ会稽が山水の美で名を馳せる場所であったというだけでは、謝霊運等の詩が建康に伝わることは無かろう。会稽の山野から一足飛びに建康に情報が伝わるとは考えにくいからである。

図一、文化と自然との間隔^⑨



山水の愛好、別墅の建設、田園詩と山水詩と山水遊記及び山水画の成立、隠者のライフスタイルの芸術化は、図一に示されるように地形学の立場から都市を中心に郊外、田園、原野に分節化される。この図における建康を会稽に置き換え、会稽城市、郊外（東田・蘭亭）、園田、原野の四つに分節化すると、浙江地域の大都市である会稽は、郊外にある王羲之の蘭亭及び原野にある謝靈運の山居を内包する。会稽と建康の間には主として官庁を介した情報のやり取りが頻繁に行われたであろうから、会稽の郊外から

会稽城市に向けて発せられた情報は、まず城内で話題となり、次いで建康に伝わったはずである。つまり会稽の自然豊かな山野と首都建康との間に、大都市であり、陪都である会稽が存在したからこそ、王羲之の「蘭亭の宴」や謝靈運の山水詩は、建康の人々の耳目を集めたと言って良く、逆に言えば何の名所も有しない小規模の地方都市であれば、このような現象は見られなかったのではないかと思われる。謝靈運が居住したのは、確かに郊外や山野ではあったかもしれない。しかし、言葉の上でいくら隠遁を気取るうとその生涯の大半は隠遁ではなかったし、隠遁の地は会稽という大都市の周辺領域に存在するため、此処に住むことは首都建康との関係を断絶することでは到底あり得ない。そしてその経歴からも分かるように、謝靈運は機会さえ与えられれば、再び首都に戻って国政に携わることが出来たであろうし、またそれが不可能であったとしても、ある場合は積極的に、またある場合は消極的に政治社会に対するメッセージを発することが出来た。就中、後者の場合に用いられた手段が、会稽における創作活動であったと考えられる。つまるところ隠遁を詩賦に詠みながらも謝靈運の意図するところは、隠遁ではなかったのである。

同様の現象は、謝靈運より少し後の時代の謝朓（四六四～四九〇）についても言える。南齊の謝朓は、建武二年（四九五）に宣城太守として彼の地に赴任し、自然を詠じた優雅な詩を多く作っている。そして彼が宣城太守を勤めたのは僅か一年の赴任であっ

たにもかかわらず、宣城と言え、李白が敬慕したことから分かるように謝朓に縁の深い土地として名を知られている。しかし、実は宣城は後に南齊の明帝となった蕭鸞と深い繋がりを持つ都市であり、宣城には蕭鸞の幕府が形成されていた。また謝朓が宣城の太守を拝命したのも、決して自然の風景を満喫するためではなく、明帝のブレンとなり、より高位に登る意図をもってのことであった。このように見ると、自然豊かな山水に遊び、謝朓運や謝朓のように山水詩を作るとは、必ずしも隠遁とは結びつかないことが分かる。そして名譽も地位も棄てて隠遁を志向するのは無いからこそ、王羲之や謝靈運は首都の人々の注目を集める地である陪都会稽に居住し、自身の存在を主張したのではなかったか。もちろん前述のように、謝靈運は会稽の地を故郷と認識し、会稽に対してトポフィリア(場所愛)を抱いたには違いない。だが、その目は常に首都建康に向けられており、それ故に彼は首都建康の人々の鑑賞に堪えうる山水詩を創作し続けたのである。

おわりに

ここまで、まずトポフィリアについて紹介し、次に陪都の定義とその概念について規定した。それから王羲之と謝靈運と会稽との関わりについて論じ、彼らの作品中の世界である蘭亭や会稽の別墅は、浙江地域の主要都市であり、陪都でもある会稽城市に近接しており、彼らが会稽城市を間において首都建康に向けて自ら

の存在を主張していたことを明らかにした。前にも述べたように、王羲之・謝靈運と陪都会稽との関係は、陪都における詩人の創作活動の一つの典型であると考えられる。陪都の詩人が陪都における生活を詩文に綴り、一見するとその土地に多大な愛着を示し、隠遁生活におけるその営みを謳歌する一方で、その視線が首都に向けられている。こうした現象は、尋陽における陶淵明(二六五〜四二七)や、晩年を洛陽で過ごした白居易(七七二〜八四六)においてもやはりそうであるのではないか。陶淵明及び謝靈運の故郷が、それぞれ尋陽・会稽であるのは恐らく偶然であろうが、逆に考えると、彼らは陪都を故郷に持ったが故に、彼の地における創作活動を充実した深みのあるものに成し得たと言える。今回、陶淵明と白居易については取り上げなかったが、この両者については、いずれ別の機会に論じるつもりである。

注

- (1) イーファー・トゥアン著、小野有五、阿部一共訳『トポフィリア 人間と環境』(ちくま学芸文庫、二〇〇八年)、第一章「序論」、二七頁を参照。初出は、Yi Fu Tuan, *Topophilia: A Study of Environmental Perception, Attitudes and Values* (prentice-hall, Englewood Cliffs, New Jersey, 1974)。
- (2) 注(1)所掲、『トポフィリア』第八章「トポフィリアと環境」、一七九頁。
- (3) 大室幹雄『園林都市 中世中国の世界像』(三省堂、一九八

五年)は、その最たるものである。その他に鎌田出「白居易の愛した風景―杭州『西湖』へのトポフィリアー」(中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第十七集、一九九八年)に、白居易と西湖との関係を考えるにあたって、トポフィリアの概念が用いられている。

(4) 一例を挙げれば、『中日大辞典』(増訂第二版、大修館書店、一九八七年)では「副首都」と翻訳されている。

(5) 『資治通鑑』巻百十三、晋紀三十五、安帝元興三年(四〇四)四月の条を参照。

(6) なお、安帝は四ヶ月後の元興三年(四〇四)四月に桓玄によって、さらに江陵へと連行されている。『資治通鑑』巻百十三、晋紀三十五、安帝元興二年(四〇三)四〇四の条を参照。

(7) 王羲之筆、伝馮承素模「蘭亭書」(八柱第三本)(故宮博物院藏)。原文の引用に当たっては、孫玉文、申新仁編『馮承素模蘭亭序』(歴代蘭亭序墨宝三、吉林文史出版社、二〇〇九年)を用いた。原文は以下の通り。「永和九年、歲在癸丑。暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭。脩禊事也。羣賢畢至、少長咸集。此地有崇山峻嶺、茂林脩竹。又有清流激湍映帶左右。引以為流觴曲水、列坐其次。雖無絲竹管弦之盛、一觴一詠、亦足以暢敘幽情。是日也、天朗氣清、惠風和暢。仰觀宇宙之大、俯察品類之盛。所以遊目騁懷、足以極視聽之娛。信可樂也。」

(8) 『世說新語』企羨篇の該当する原文は次の通り。「王右軍得人以蘭亭集序方金谷詩序、又以己敵石崇、甚有欣色。」

(9) 吉川忠夫『王羲之―六朝貴族の世界』(清水書院、一九七二

年)、三六〇―三九頁及び六一―六七頁を参照。

(10) 『晋書』巻六十五、王導伝に、次のようにある。「及賊平、宗廟宮室並為灰燼。温嶠議遷都豫章、三吳之豪族請都會稽。二論紛紜、未有所適。」なお、年次については『資治通鑑』巻九十四、晋紀十六、成帝咸和四年(三二九)二月の条を参照した。

(11) 『晋書』巻六十四、簡文三子・司馬道子伝を参照。

(12) 石川忠久『陶淵明とその時代』(研文出版、一九九四年)に、当時の会稽には荊州・建康の双方に距離を置き、会稽の山水に遊ぶことで中央に対して優游のポーズを示す王羲之を中心としたグループが形成されていたことが指摘されている(二六―一頁を参照)。

(13) 謝靈運の作品の引用は、『謝康樂集』(明・張溥『漢魏六朝百三家集』所収)より行う。また作品の繫年は、顧紹柏『謝靈運集校注』(里仁書局、二〇〇四年)附録二、「謝靈運生平事跡及作品繫年」に拠る。なお、「与廬陵王書」の原文は以下の通り。「會境既豐山水、是以江左嘉遊、並多居之。但季世慕榮、幽棲者寡。或復才為時求、弗獲從志。至若王弘之拂衣歸耕、踰歷三紀。孔淳之隱約窮岫、自始迄今。」

(14) 矢野主税「東晋における南北人対立問題」(『史学雑誌』第十七編・第十号、史学会、一九六八年)、四一―四四頁を参照。

(15) 該当する原文は以下の通り。「靈運父祖、並葬始寧縣。並有故宅及墅。遂移籙會稽、修營別業、傍山帶江、盡幽居之美。」

(16) リヒャルト・ムウター著、大澤章訳『ジャン・フランソア・ミレー』(山野書店、一九六六年)、一七八頁を参照。ミレーに關連する記事については、同書を参考にした。初出はRichard

Muther. Jean Francois Millet (The Langham series : an illustrated collection of art monographs ; v. 11, A Siegle, London, 1905)

- (17) 小尾郊一『謝靈運—孤独の山水詩人』(汲古書院、一九八三年)において、謝靈運が「山居賦」を創作したのは、宋朝に対する勢力の誇示であり、退隱と言いなながら、中央政府に無言の抵抗を試みていた可能性が指摘されている(一五三—一五四頁を参照)。

- (18) 『宋書』卷八十七、謝靈運伝に見る原文は次の通り。「與隱士王弘之、孔淳之等縱放爲娛、有終焉之志。每有一詩至都邑、貴賤莫不競寫、宿昔之間、士庶皆遍、遠近欽慕、名動京師。」

- (19) 該図は注(3)所掲大室氏著書、第十二章「郊居 園田居 山居—文化と自然の配景画法」、四七八頁所掲図「66 山水趣味の scenography」より引用した。ただし、閲覧の便を考慮して絵を省き、地名を枠で囲った。

- (20) 小尾郊一氏は、『中国の隱遁思想 陶淵明の心の軌跡』(中公新書、一九八八年)において中国の隱遁思想の特色を、「隱遁」が絶えず「仕官」を意識して行われるのが中国の伝統であり、世捨て人のような人生を送ることは中国的隱遁ではないとする(二六—二頁)。また隱遁者ではない謝靈運の、官僚として隱遁を標榜する生き方、考え方は、後世も含めて知識人を代表するものであるとの見解を示している(一一頁)。なお、内山俊彦氏は「仲長統—後漢末—知識人の思想と行動」(『日本中国学会報』第三十六集、一九八四年。後に同氏『中国古代思想史における自然認識』(創文社、一九八七年)所収、六六—六七頁に

おいて後漢の仲長統を取りあげ、「現実に対して機能すべき政治思想の一方で、心身の安定・充足を求める態度には、一種の平衡感覚を読みとることもできるのであり、それは必ずしも人格の分裂ではなく、逃避・隱逸とも挫折とも異なるであろう。」と述べているが、朝廷を視野に入れた政治思想と隱逸を志向するという精神的な営みが矛盾するものでないことは、謝靈運においても同様であると考えられる。

- (21) 佐藤正光「宣城時代の謝朓」(『日本中国学会報』第四十一集、一九八九年)を参照(後に同氏『南朝門閥貴族と文学』(汲古書院、一九九七年)所収)。